

第14回 とさ・子ども主体の学校生活づくりを考えたい会 (通称 りぐる会)

テーマ 豊かに生きよう ～ 今を ^{あした} 明日を 将来を ～
報 告



令和元年6月1日(土)に開催されました「第14回 りぐる会」の報告をします。

- 1 出席者は28名で、内訳は、特別支援学校関係10名、特別支援学級関係11名、県職員1名、教育研究所関係2名、そして助言者・事務局合わせて4名です。
- 2 話題提供は、高知市特別支援教育スーパーバイザーの岡 浩子さんから「知的障害特別支援学級へのねがい」でした。教室に時間割がない、下学年のプリント学習、教室の環境整備等の現状から、子どもたちの自立と社会参加にむけて、①本物の生活を大切に ②手応えを感じて ③実りある交流及び共同学習であってほしい という願いが語られ、会場から教科学習についての質問がでました。
続いてインタビュー形式の話題提供は、高知市立高知特別支援学校教頭の澤田 直柔さんで、「障害のある弟と歩んで」でした。幼少期のこと、進路のこと、家族全員の年齢や家族構成に応じて家族の在り方の変容等。教職員に臨むこととして、保護者に将来の見通しを示しつつ、今の課題に共に取り組める力をつけて欲しい、とのお話が心に残りました。
- 3 明治学院大学准教授 高倉 誠一先生から、新学習指導要領のもと、通常の教育との連続性重視ゆえの「教科学習をしなさい」という地教委の指導の広がりに対して、①「特別の教育課程」は、子どもの様子に応じるためのものである ②子どもの様子に応じた教育課程を用意する必要は変わらない ③子どもにとって、自信を育み力をつけることのできる教育課程を最優先すべき との力強いミニ講話をいただきました。
- 4 遠隔地会員 中坪 晃一先生の「船橋の隠居爺の独り言シリーズ」の第一回のテーマは、「職人のような人たち」でした。退職後、ボランティアとして施設に顔を出し、利用者といっしょに作業。多くの利用者はそれぞれの担当の仕事をよくこなし、ハリのある声、自信たっぷりの得意げな表情や笑顔。見事な職人の姿に度々頭が下がる・・・様子が生き生きと伝わってきました。
- 5 持参物の紹介は、「運動会」、「遊び」、「年間計画」、「めだかの学校」等々。指導案であったり、学級通信であったり、まとめであったり、お持ち帰りのすてきな資料が満載でした。この普段着の実践紹介は、後の「お客」でも話題になりました。
- 6 事務局より、①9月にある「特殊教育学会」に高知市立鴨田小学校の谷 雄二さんがシンポジストとして登壇 ②千葉での全国生活中心教育研究会研究大会の簡単な報告 ③次回(第15回)のりぐる会は11～12月上旬を予定 等の連絡がありました。
- 7 「お客」は、中坪 晃一 先生 の乾杯の音頭で、相変わらずの盛り上がり、酔いしれて・・・
写真撮影・・・全員そろわず残念！！



一 子ども主体
二 続ける
三 実践をベースに
四 高め合う
五 柔軟な対応
六 仲間を増やす
七 あせらず じわ
八 功を求めず
本音で語ろう

SVNQR 八策

★ 「りぐる」とは 土佐弁で ① いつもよりがんばる 念入りに ② 筋を通し、軸をぶらさない です。
文：事務局